

あさひ文学

第21回旭市文化祭参加号
令和7年11月1日発行



飯岡漁港

旭市文化協会 文芸部

あさひ文学

第二十一回旭市文化祭参加号

目次

ウエルビーイングを高めるために……………	旭市長	米本 弥一郎	1
旭の教育「郷土 夢 未来」……………	旭市教育長	向後 依明	2
市政二十周年に思うこと……………	旭市文化協会会長	花園 千名美	3
方言あれこれ……………	旭市文化協会文芸部長	相沢 弘幸	4
千潟八萬石 ことばと習俗②……………	旭市文化協会前文芸部長	花香 竹夫	5
俳句……………		山火俳句会	6
俳句……………		春蕾俳句会	7
短歌……………		真心短歌会	10
俳句……………		さざなみ俳句会	11

俳句	椿の会俳句	17
短歌	忍び坂短歌会	20
旭市内の芭蕉塚	東総郷土史研究会 千本松 稔	23
佐貫城についてあれこれ	海への会 船倉 武夫	24
イランへの旅(二)	さざなみ会 鈴木 和江	25
藤原新也を読む	さざなみ会 滝澤 昇	26
令和七年 桜まつり 十三回詩歌大会		27
編集後記		32

表紙の写真

飯岡漁港

ウェルビーイングを高めるために

旭市長 米本弥一郎

旭市には、全国に誇る旭中央病院や、豊かな自然が育んできた農水産業とそれを基盤とした商工業など、たくさんの方の魅力があります。この豊かな旭市を次世代へ繋いでいくため、私たちは「ウェルビーイングの向上」を目標に掲げ、まちづくりに取り組んでいます。ウェルビーイングとは、身体的、精神的、社会的に満たされた良好な状態のことで、まだ馴染みは薄いかもかもしれませんが、国連総会で合意された、持続可能な開発目標（SDGs）にも位置づけられています。

ウェルビーイングを高めることにより、健康の増進や能力の向上など、個人と社会の両方に多くのメリットがあります。幸福感が高い人は、創造性や生産性が高まり、長寿にもつながるという調査結果も

報告されています。

近年は企業や自治体にもウェルビーイング担当の部署を設置する例が増えています。

ウェルビーイングを高めるには、個人の健康だけでなく、他者とのつながりと日々のささやかな感謝の輪を広げていくことが重要です。日々の小さな出来事にも「ありがとう」を伝えると、相手も自分も心地よさを感じ、ポジティブな連鎖が生まれます。家庭内だけでなく、近所や地域、職場や学校といったさまざまな場所で感謝の気持ちを伝えることで、困難に直面しても互いに支えあう基盤が強くなります。

人口の減少や少子高齢化は旭市においても避けては通れない大きな課題ですが、私たち一人ひとりの行動が、地域全体の大きな力となります。まずは身近な人に「ありがとう」を伝えて、皆でウェルビーイングな未来を創っていきましょう。

旭の教育「郷土 夢 未来」

旭市教育長 向後 依明

人生百年時代の到来や科学技術が急速に発達する予測困難な時代において、市民一人ひとりの豊かで幸せな人生と、社会の持続的な発展を実現するため、教育の果たすべき役割は益々大きくなっています。

また、これからの教育には、全ての市民が幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるウェルビーイングを向上させていくことが求められています。

旭市は、本年七月一日、統合から二十周年を迎えました。この節目の年に、未来に向けての教育の柱となる「旭市の教育に関する大綱」を策定いたしました。策定に当たっては、昨年実施した「総合教育会議」において、市長と教育委員会とで議論を重ね、本年四月に公開したところです。

この大綱の基本理念は、「郷土 夢 未来」です。

人は「夢」や希望、大きな目標があるから、自ら努力し続け、成長を繰り返し、個々が備える能力や可能性を十分に高めていくことができます。

さらに「郷土」に愛着と誇りを持てるからこそ、郷土の「未来」を切り拓く、豊かで魅力ある社会の創り手として成長できるものと考えます。

教育委員会では、この基本理念の下、郷土を愛し、夢に向かって歩み続け、未来を拓く人づくりのため、一丸となって様々な施策に取り組んで参ります。

そして、大綱の基本目標4には「いつでも・どこでも・だれでも」心豊かで、生きがいのある人生につながる学びの支援を掲げております。

旭市文化協会文芸部の活動は、この目標の実現に迫るものであり、正に私たちが目指す、ウェルビーイングの向上につながるものです。これからも、「みんなで創る未来ずっと大好きなまち旭」の実現に向けて、貴団体との連携をより一層深めていければ幸いに存じます。

市政二十周年に思うこと

(旭音頭・飯岡大漁節)

文化協会会長 花園千名美

一市三町で旭市制二十周年、これを機会に旭市文化協会も芸能部門は東総文化会館、美術・文芸部門は飯岡ユートピアセンターで活動してきました。昨年、旭イオンタウンの夏祭りに協力の依頼を受け、民謡・舞踊・フラダンスのグループで協力しましたが、盆踊りは観客も参加できるものとして「旭音頭」「大漁節」をとりあげました。ところが「大漁節」はともかく、「旭音頭」は、旧市内の方は何とかなるのですが、三町の方には知らないと言われ、遅ればせながら「旭音頭」の普及を心がけています。また、「大漁節」については、「海への会」の展示の中に「飯岡大漁節」がある事を知り、この二曲を旭市の遺産として残せたらと思います。ご存知の方もあると思いますが、「旭音頭」は昭和二十五年旭町役場と旭観光協会が募集し「真福寺」の住職、中村頼真さんが町の名所、物産を織り込んだり

ズミカルな歌詞が当選して今日に至っています。現在は曲風も歌詞も一部変わりましたが、七十五年続く「旭音頭」更に「飯岡大漁節」。もう少し基本のものを大切に、「継続は力なり」で頑張って行きたいと考えています。因みに「旭市歌」「旭ブルース」「旭太鼓はやし唄」。これらも同時期に旭市選定としてレコードになっています。

旭町音頭

作詞 旭町観光協会 中村 頼真

作曲 竹岡 信幸

都逃れた よいよい 義経さへも
伊達に来はせぬ 伊達に来はせぬ
九十九里 さて
昇る旭の 昇る旭の

(はやし)

やっこらさのちゃんちよんで
よいとさの とんからりんと
紅の色 それ 紅の色

(以下6番までつづく)

(現在は旭音頭として歌われ、はやしは変更されています)

方言あれこれ

文芸部長 相沢 弘幸

千葉県東総地方の土地の言葉には「おあがんさいまし」(こんにちは)「おしまいなさいまし」(こんばんは)の様な柔らかい響きのものもあれば「てれんこん てれんこん」してこの「でれすけ」が「きたんきたん」にするぞ。みたいな脅迫的な強い言葉もある。「おっぺす」(押す)「しょっぴく」(引っ張る)「うんならがす」(張り切る)はニュアンス的に意味を掴めると思うが「はがじ」、「むさんこ」はどうだろうか。「はがじ」は、いたずらっ子。「むさんこ」は、危ない事を平気でする子のことだ。

その土地で生まれ、長年培われてきた言葉(方言)は、一つの文化であり大切ではあるが、使う人が少なくなれば、その方言も廃れてしまう。しかし、その方言でなければ、しっくりと表現できない事もある。

東北地方の言葉は昔、ズーズー弁と揶揄され、都会

で話すと笑われてしまい、つい口が重くなってしまおう。でも、「ふるさとの訛なつかし停車場の」啄木。「故郷のかおりを乗せて入る列車」井沢八郎。の様に故郷の言葉は都会に出てきた者の心の支えでもあった。

宮城県の方言に「めぐさい」「おしよすい」という言葉がある。この様な使い方をする。

何回も何回もアメリカに行って、まるで子どもの使いのようで「おしよすいなや」頭を何回も下げて「めぐさいごだ」。赤沢さん「ごしやがないのすか」。トランプ大統領との関税交渉を見ていると、つい方言が口をつく。

言葉は方言にしる標準語にしる、その民族の言語であり、民族の文化である。存在価値でもある。方言を大切にしたいと思う。と同時に過去のそう遠くない時代に我が国は、アジア諸国の言葉を奪った事を忘れてはいけない。

次の東総地方の方言の意味は何か。考えてみて。

「おう、きもえる。しみじみやれよ」

千潟八萬石 ことばと習俗②

“ 呷 ”について

前文芸部長（学芸員） 花香 竹夫

呷^{かます}は藁製の民具の一つで、俵と共に容器として用いられ、古くは「蒲簀^{かます}」とも書かれました。稲藁^{むしろ}を筵^{むしろ}に織り、それを二つ折りにして両脇を細縄で縫い合わせたもので、容量によつては幾通りにも作られ、穀物や肥料、塩などが入れられました。稲作地帯の冬の内職に作られたのです。

次第に呷に代わり、麻・紙・ビニール袋になり、呷といえは、婚礼の時新郎方から新婦方へ贈る呷が藁製で見られるくらいとなりました。この呷には白米三升とか五升とか奇数の升目だけ入れて、一本の縄で切らずに七力所を結び、酒肴と共に贈る風習があり、持参する人を「荷呷つけ」と呼んでいたのです。

また親戚などで祝儀や仏事等があり手伝いを頼まれると、白米二升を袋に入れて持参しますが、これも呷と呼んでいました。

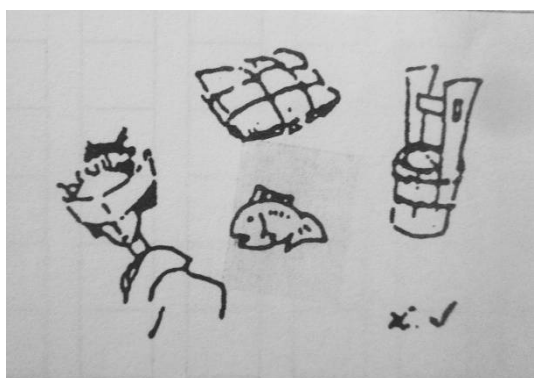
この様な呷をやりとりする間柄を「呷つきあい」と言っています。これは氏仲間や村内の姻戚間や隣近所で行われてい

ました。

祝儀の時の呷には、藁五、六本を輪形に結んで入れ、不祝儀と区別したのです。

葬式など不祝儀の場合は、当日の夕方呷袋を空のまま返し、祝儀の時には、祝事は長びく程良いという事から呷袋は新直会^{しんなおらい}の終わるまで置き、祝事が移るようにと少しの物を添えて袋を返しました。

添え物には、よく付け木などが用いられ、付け木は硫黄で出来ていて「祝う」に通じるからですが、後にマッチが用いられる様になったといわれます。



俳句

山火俳句会

石橋 孝子

花筏切り裂きながら田舟行く
吹く風に稲穂の匂ふ夕べかな
波を切り神輿輝く御浜下り
幼な子の風に転がる木の実追ふ
稲妻の横走りして夜の海

飯田 芙美子

大声に名残り惜しみて年賀の子
鈍色の怒濤の海や野分立つ
搗き加減選び真白や今年米
白光を放ち梢こずえに月昇る
冬の海金波きんば煌めく日の出かな

負担金について

文化協会費 年額 1000円

◎あさひ文学負担金（文化祭 十一月）
俳句は5句 250円

短歌は5首 500円

川柳は3句 150円
随筆は1頁 1000円

◎あさひ文学負担金（美術展 三月）

俳句は5句 250円

短歌は3首 300円

川柳は2句 100円

随筆は1頁 1000円

◎機関誌「文化旭」掲載（五月）

俳句2句・短歌1首 負担金はなし

◎桜まつり「詩歌大会」応募（四月）

負担金はなし

団体によっては、この他に会費あり。

俳句

春蕾俳句会

宮負 克己

空晴れて筑波嶺拝し甘藷掘る
なつかしき友と邂逅春隣り
蚕豆を茹で珍しき友を待つ
宮の森夕暮誘う時鳥
青空に天女の舞の合歡の咲く

石毛 せつ子

鶯の声の潤ふもやの朝
里山の丸き稜線青葉照る
水無月の風に広田の濃き匂い
水を打ち背山の風を誘ひ込み
盆僧の黒き衣や風に透く

花香 竹夫

山藤の乱れを誘ひ夕鴉
新緑のつばさ一途に瀬に迅し
水無月の風が誘う墓参り
夕ぐれの微かに响く遠花火
文疲れの眼劳る昼寢覚

菅谷 茂穂

花すだれホバーリングが吸い込まれ
紅白梅空をうばいつ咲き競う
春田水朝日を受けて水鏡
老鶯の訝となりし峡の里
水郷や人人人の花菖蒲

花香 静子

猫に隠れ猫の破った障子貼る
出無精のそろりそろりと二月かな
お地蔵の赤い前垂れ梅日和
関税を上げる上げると春嵐
初物よするり二膳をうり漬で

荒木 悦子

開拓の碑に初雪は残りけり
明け早く優しき音の竹林
九十年生きて昭和百年の春
祭り笛遙かなる父耳にあり
特攻隊帰らぬ蝶が盆に舞う

佐伯 洋子

露天風呂熊笹傾ぐボタン雪
堰切つて利根解き放れ春の水
幽学の教え訪ねて青葉雨
八万石青水無月の風渡る
まず風を仏間に通し盆支度

衣鳩 順一

菜の花で今年も染まれ利根堤
大利根や小船行き交ふ水の春
絶滅の目高救ひの和を広げ
汗拭ひ駆け足軽し宅配車
風薫る搾乳待ちの牛の声

薄田 美津子

早々に旅程書き入れ初暦
この席に日がな居し妣春炬燵
ペダル漕ぐ背中に孕み若葉風
燕来るわが家の軒を違えずに
まどろみの耳に優しき慈雨の音

前田 春代

あれこれと楽しき見付け老いの春
湧水の微かな音や春の水
鶯の声する方に歩を向けて
柿若葉華やぎ残す無人宅
草刈りの音の響きや梅雨晴間

阿部 三郎

荒庭に光こぼれる初日の出
寒月の古墳から出し星空や
夜桜に酔いて酔いて夢宴
そよ風に青葉萌黄色道明寺
御仏のさびしき盆に酒置きて

銀原 俊

窓の霜布団の城に身を潜め
雨上がり雫まといて初桜
壇の上ただ前を見る卒業子
夕風が汗の名残りをそつと撫で
蟬の声さえ溶けてゆく午後一時

井沼 雅子

冬晴れに洗い干したや己が魂
春暁やうつらうつらと夢三つ
雲厚く音のみあはれ揚花火
かわらけのご先祖様の盆の膳
小鷺の子発ちつ戻りつ親の許

短歌

真心短歌会

宮負 克己

九日は長崎原爆落つ日

ミンミン蟬のしげく鳴く

少数の与党苦しきおろし迄で

山山て来ては尚苦し

久し振り孫に遇ひておみやげの

海山川^{ためつもの}味物多く

花香 竹夫

足腰のふらつきあれど暑に

耐へ野菜造りも余生のいつなり

卯月なか納屋にポツリとランドセル

どこか寂しくお疲れ様と

いち言の叱言も言はずこの我を

育て給ひし妣なりしかり

俳句

さぎなみ俳句会

鈴木 和江

船虫や津波に残る潮仏
網戸してハーブの風のほしいまま
隠し事出来ぬは性や水海月
真つ直ぐに生きてるつもり捩れ花
松籟に低き潮騒明易し

相沢 弘幸

「夜ノ森」を桜一途に咲きにけり
朧夜や帯の艶めく乱れ箱
五月雨忌ふりこ細工の恋いづこ
半夏生校舎の裏に呼び出され
けふもまた戦のニュース土用波

伊東 禮子

夏さかり鈴の音楽し花笠の会
句会にて「一緒にして」と蟹出づる
初西瓜三人分を切りにけり
今度の課題曲「卒業写真」
いちじくやひとつの時ははんぶんこ

石井 敬子

小高きに句碑ぽつねんと椿寿の忌
いっせいに素読流るる新学期
食卓は瑠璃の器や今朝の夏
涉り合ふ白州次郎や敗戦忌
水澄むや蕎麦を啜りし深大寺

石井 孝

今いづこ空き家の屋根に花の雨
幼児の燥はしやぎをのせて夏来る
土用波「伊八の波」や思ひ出づ
「映像の世紀」の語る夏の果て
ポチ逝きて足跡一つ秋の浜

大後 秀樹

復興の能登に捧ささげる除夜の鐘
漆黒の海を真朱まそほに初日の出
初夢のバンジージャンプ雲の上
今朝の春白米ありて足るを知る
初旅や五浦いづらの海に筆を執る

岡 邦俊

瓜の馬夜中の駅に二等兵
アンマーの夢を見ていた対馬丸
秋晴や薬自慢の四人旅
秋霖や指名手配の眼の並ぶ
秋澄むや遠近法の奥の人

岡野 京子

夏に入る頂までの道ふたつ
スサノオの腕輪のごとき茅の輪かな
告知する医師の横顔半夏生
土用波愚かに生きてみたくなり
盆の月父サイパンの石ころに

鎌田 とみ子

青き海春告草の匂ふ丘
新緑や波紋拡ぐる手漕舟
庭園の目眩まばゆしオブジェ夏兆す
亡き友に元氣と問ふや遠花火
燦然と芒持のぎつるなり麦の秋

栗栖 峰子

藍よりも深き蒼色菖蒲咲く
人形ひとがたに穢れ託して夏越しかな
揚花火川面にさざ波起こしけり
ラッセラーの声はずませて夏祭り
提灯に父母の灯ともし盆迎へ

佐久間 松枝

山路来て久し振り聞く蟬時雨
深山の蜩あまぎのソロかん高き
梅雨に入り天霧あまぎらふ日々雨もなく
名月に機影重なるシャッターチャンス
極暑日の暮影の風の心ち良き

高野 寿美子

芝桜しきりになづる幼かな
海原の光り輝く夏来る
賑やかに下校の四人半夏生
曇天を揺るがす如く土用波
土用波目路の海原逆立てて

高野 富子

バラバラと花火の臭い浜辺散る
打ち水を喜ぶ小犬かけ廻り
アスファルト^{みみず}蚯蚓のミイラどこまでも
九十九里歩いてみたし夏の夜
猛暑中神輿をゆらす心意気

滝澤 昇

鳥雲に足踏みはずす粗忽者
屈み込み足の爪切る梅雨侘し
海鳴りを全身で受く土用波
待ち望む喜雨の音聞く野良仕事
精霊と暫し語ふ盆の月

並木 紋子

春雷に迷はずはずすイヤリング
眠る子を起こさぬやうにさくら散る
犬吠の真白きポスト夏は来ぬ
抜き捨てし草起ち上がる半夏生
早朝の虚空に光る蜘蛛の糸

林 利恵子

夕立や駆け込む軒にもうひとり
おむすびと新茶の香り笑顔満つ
風死すや石に意志あり磨崖仏
鉋電に揺られゆられて春隣
鋏置けば風のにはひや半夏生

平山 伸

突く人を募る貼り紙除夜の鐘
虚子望む犬吠の海春めきて
芝桜空を押し上げ彼方へと
カーテンに映る葉影や夏来る
明日来るやんちゃ坊主に選る花火

深堀 和子

ブラウスの輪染み卵の花腐しかな
星の砂小びんに拾ふ沖縄忌
妙高に星は見えねど初螢
手花火のやがて輪になる団地かな
鏡台に匂へる昭和おいらん草

松本 祥子

碑のくずし字辿る木下闇
ひたすらに墓石をのぼる毛虫かな
夏雲を写して湾の動きけり
夕月や昼の暑さを纏ひける
釣り舟を打つ波音も夏の果

柳堀 節子

白梅や空を従え咲き誇る
紅深く想いを秘めて梅薫る
叱られて家路を辿る麦踏み
辛夷散り悲しみと行く野辺の葬列^{れっ}
灌仏や一年分の雨を浴び

吉田 哲子

句をなぞり老梅香る浄国寺
明易し添い寝のママの寝息かな
幼子の追う目キラキラしゃぼん玉
祭壇にほほえむ姉を偲ぶ夏
青虫の葉脈のレース青き風

川口 靖夫

あれこれと思考錯誤の努力賞
七夕を眺め眺めて人の波
太鼓音集る男女神輿かな
向日葵や葉擦れ激しき風となる
味くらべ果物美味し秋来る

菅谷 一雄

正月や竹馬の友は今何処
春浅し柩の如く無言館
父母がいて同胞がいてこいのぼり
クレヨンの花火画用紙埋め尽す
名月を共に眺めし祖父ありき

第56回オンライン句会

・芋の露溢さぬほどの風のあり

鈴木 和江

第55回オンライン句会

・夕虹や退院告げる若き女医

相沢 弘幸

俳句

椿の会

荒木 美枝子

風薫る手書順路の遊歩道
小綬鶏の声くぐもりて梅雨に入る
御朱印を巡る信心青紅葉
図書館や窓辺の睡魔薄暑光
長電話置いた受話器に夜の秋

花園 千名美

夕闇に胡弓さまよふ風の盆
風鈴や風駆け抜けて音せわし
桐一葉反論できぬ我がいる
まん丸な月の賞^めずるは稲穂波
祝^{しゆくほうじょう}豊穰かがり火清し熊野社よ

浪川 とし子

薫風にさそはれゆくや回り道
為すことの多き一日^{ひとひ}や梅雨晴間
夕餉待つ手酌の父や冷奴
山開き怖^{おそ}さ知らずの若き日に
あと幾^{いく}日孫と語らふ夏休み

守部 洋子

月を見る平安人の眼^{まなこ}して
曼珠沙華祠^{ほくら}は少し風を呼び
落葉舞う森の妖精笛吹けば
掃き寄せて落葉ぬくしと思いきり
石ひとつ拾って帰る秋の浜

高木 健寿

渡りゆく雲梯の子ら風薫る
紫陽花や人間ドックの結果待つ
冷ややつこ冷たきままに喉の奥
宅配の箱の重たし夏野菜
つる絡む電柱の先野分かな

和 日和

小春日の縁の昼寝やねこ並ぶ
にげ水の向かうに友の迎えあり
コスモスの視界一つに花畑
縞枯の山並み臨む信州路
汀行く足跡一人夏の果

早川 悟

菜の花の畝うねに動ごゆる園児帽
アジサイに雨粒光るレンズ越し
落葉踏み橋渡りけり弁天堂
梅雨空に園児お迎え傘の花
真夏日に園児跳ね翔ぶ駐車場

伊藤 あき子

風薫る小江戸の佐原舟巡り
風薫る里山歩き汗にじむ
梅雨入りで紫陽花映える川堤
梅雨晴れの青空まぶし菜園か
食卓に涼しき添える冷奴

宮内 幸平

畔に咲くたんぽぽの種子風に舞い
風を受け重き稲穂がこうべ垂れ
散歩道輝く稲穂風に揺れ
露草の色鮮やかに咲きにけり
朝露に紫陽花の花甦る

高品 彩

気怠さの残るこの身の今朝の秋
鉢植の金柑数多爺の笑み
竹藪に点点点す烏瓜
吾亦紅ポツリポツリと語りかけ
送り火の闇に消えゆく妣の影

相沢 弘幸

薰風やロードレースの先導車
爆音のバイク軍団夏の海
退院日お酒は未だと冷奴
迎火に伯父は徳利ぶらさげて
流燈や根室の海の涯ての涯

短歌

忍び坂短歌会

藤井 和子

炬燵より日向の縁に誘われ張戸の外は梅の一輪
汝が植えし金柑の木にほつほつと灯すが如く実の熟れ始む
水ひかる早苗田のそこかしこにて湧き上がるかに蛙の声す
甘茶の香り入りくる部屋に目を閉じて故郷の野辺思っていたり
咲く花に優しき強さ受け取りて花には花の穏しき役目

増田 満里子

山の間に沈みゆく陽を見送りて返りみる空満月昇る
時折に生家見廻る我を迎えねぎらう如く鶯の声
幼子の掌^{てのひら}の如くハナミズキ薄紅に咲き始めたり
オカリナの音色聞きつつあやめ園母と巡りし若き日思う
柔らかき緑の車窓眺めつつ再会の場面思っていたり

亀田 昭子

北国の姉に届けむ花便り我が家の梅も咲き始めしと

隣家へ続く細道紅椿散り華やげばよけて通りぬ

イヤホーンで聞く深夜便しんみりと心にしみる歌の数々

咲き継ぎし花終わりとる我が庭に山ぼうし白く咲き始めたり

白々と栗の花咲くこの道はわが故郷に続く道はも

仲村 克子

小鳥らの鳴く聞こえる庭の畑春の光の中に草引く

雷鳴と共に降りたる電^{ひよう}止みて束の間もなく綿雪の舞う

採りたての三月豆の筋を取る青き香りの爽やかにして

瞬^{まばた}きをする如過ぎし四十年共に歩みし友等と語る

芝を刈る風すがしくて朝の庭一日の幸始まる気配

八木 佐和子

娘のくれし足元灯の薄明り今宵も我を見守る如し
取り寄せてようやく植えし利休梅身に染みむほどに真白く咲けり
菜園に育つ野菜を眺めつつ五月の風に吹かれていたり
杖つきて横断歩道をわたる老い渡りきるまで暫し見ており
庭に咲く額紫陽花の藍深く青春の日々思っていたり

加瀬 教子

保育所の送迎せし孫卒業す十三年の来し方思う
青空のあわいに見ゆる桜花車輪にぼんぼり微かに揺れる
幼孫芝生に転ぶその時もアンパンマンの人形離さず
「町娘」「桜小町」の名を持ちて菖蒲咲きたり楚々と咲きたる
絨毯を広げし様に水田に白とピンクの蓮田現る

旭市内の芭蕉塚

東総郷土史研究会会長 千本松 稔

古池や蛙飛び込む水の音・閑さや岩にしみいる蟬の
声などの有名な俳句や俳諧紀行文・奥の細道の作者で
知られる松尾芭蕉。その俳句碑が旭市内に3ヶ所あり
ます。

一、東漸寺（旭市イ）

木曾義昌公御廟所の手前右手にあります。

赤々と日はつれ勿も金風

元禄2年（1689年）7月金沢から小松へ向かう
途中に詠まれた句です。（出典は奥の細道）

よく見れば薺花咲く垣根かな

貞享3年（1686年）芭蕉44歳の句。

平成5年（1993年）芭蕉300回忌に建立され
ました（出典は続虚栗）

二、八重垣神社（旭市イ）

先頼む椎の樹もあり夏木立

元禄3年（1690年）芭蕉47歳の句。

明治19年（1886年）建立されました。

（出典は猿蓑）

三、海宝寺（旭市琴田）

花の雲鐘は上野かあさくさか

貞享4年（1687年）芭蕉44歳の句。

昭和5年（1930年）芭蕉250回忌に建立され
ました。（出典は続虚栗）

佐貫城についてあれこれ

海への会 船倉武夫

イ・千葉県内の城

一つは富津市佐貫にある上総佐貫城。関東の足利氏ゆかりの城であり、江戸時代は主に譜代大名の居城でした。もう一つは、旭市上永井佐貫にあった下総佐貫城。弥生時代に始まり平安までの遺構や遺物が残されていますが、それ以降はなく、鎌倉時代の初めに廃れたと思われます。

ロ・佐貫という地名

地名と水害の係わりを考えてみました。サヌキを砂抜ならば川岸の堤が壊れて砂が抜た状態。狭抜ならば狭い谷川の流れ。縦貫はあるが、横貫はありません。城から磯見川は左側に南北に貫いている位置と推測されます。

ハ・磯見川はおっぼり

初めて聞いたとき、「ごみを放っぼり棄てる」と誤解しておりました。正しくは、おっぼりは押堀であり、堤が水に押され壊れ、当りが深く掘られた状態を表す用語でした。

ニ・屏風ヶ浦はあかつばげ

京浜急行に屏風浦駅があります。源頼朝が平家との戦に

備えて船中から見えた連なる磯子の断崖を屏風に譬えたのだと地元で伝承が残っています。鉾子の在の方に聞くと「親爺も屏風ヶ浦をあかつばげと言っていたな」でした。

ホ・片岡兄弟、兄太郎常春、弟八郎弘経

城主の兄は壇ノ浦で三種の神器・八咫瓊勾玉を救出という功績を上げました。弟は衣川の戦まで義経に侍りました。佐貫城へ案内したとの伝承があります。

ヘ・犬若丸が犬岩

義経が連れてきた犬が大暴れ、高僧曰く「平家の亡霊がとり憑いた。殺めれば他に憑りつく」。結界に押し込め義経は出立しました。嵐で結界が千切れると、鉾子外川に導かれました。七日七晩、義経を慕い啼き続け八日目に岩となったのです。

ト・平家に非ずんば人に非ず

この言葉は清盛の義兄。義経の側室にした娘に同行して倉橋で時忠天神として祀られるに至る経緯は不思議です。

チ・落城

片岡常春は、西の正門に鬼越刑部を東の裏門に荒井丹波を配し、千葉常胤との戦いに臨んだのですが、武運なく佐貫城ともに海に消えました。

イランへの旅（二）

さざなみ会 鈴木 和江

六月にイスラエルがイランを爆撃したニュースに吃驚しました。テヘランの空が真っ赤に染まるテレビ画面に、イラジュは家族や友人たちは無事だろうか、何度も国際電話をかけましたが、連絡が取れませんでした。八月七日にようやく連絡が取れ、「大変だったけれど皆大丈夫です。」彼の言葉に安堵と共に、今私の住む日本の平和に感謝の思いでした。

テヘランへの飛行は北京でのトランジットを含めて十一時間でした。

第一泊は日本で言えば帝国ホテルの様な格調高いホテルです。高層から下を見るとかなりの渋滞、信号が本当に少なく、車列の中をチャードル（黒い全身を覆うマント）を風になびかせて女性が横切っているのです。私には信じられない光景でした。ホテルの食事も質素です。トマトのライス、キャベツ胡瓜のスライス、ハム（ロースではな

くボンレス）です。ウィンナーソーセージを炒めたもの。

野菜は五ミリもある厚いスライスで、胡瓜は種がかなり目立つもので日本の八百屋にはありません。それから紙の様に薄いパンとジャム、ヨーグルト、紅茶です。

その後、テヘランで肉屋をしているイラジュの友人の家に伺いました。広い居間に絨毯を敷き詰め、日本という腰板をクッション状の物で囲っており、それを背に座ります。すべてがお盆の上にのせられてお客の前に出されます。女性是一家の中でもスカーフを被り、ご主人以外の男性には髪を見せないそうです。夕食が終わると近くの公園に敷物を持って出掛け、小さなランプでお湯を沸かし家族で紅茶を楽しむのが習慣の様です。コーヒーはとても高級品なので。子供達はサッカーです。少し離れた所にサンダルを置きゴールにします。ゴールキーパーを一人置き、全員ゴール目指して一生懸命です。どこでもサッカーに感心しました。公園の中はランプの炎と子供達の声で溢れていました。素敵ですね。

藤原新也を読む

さざなみ会 滝澤 昇

タソガレ、という言葉がある。黄昏と書くが昔は「誰そ彼」と書いた。江戸の町、大辻で人と人との待ち合わせをする。夕方には多くの人がいて、薄暗い中で「誰が彼なのか」と視線をさまよわせる。タソガレである。

小説カワタレバナ（墓参時の見知らぬ献花の事）。母親の墓に息子が訪れると、母の好きだった花が手向けられている。妻とは別れて三年が経つので、まさかと思いつながら、春には白い山桜、秋には真っ赤な鶏頭だった。しかし三年後、春の彼岸に花は無く、近くにいた方に話を聞くと、いつも着物姿で来ていました。「来年は来られないかも」と漏らしていたという。彼は後悔する。やはり別れた妻が訪れていたのだ。妻と母親との間には特別な絆があったのだ。この小説は2年前NHKで「記憶の海」としてテレビドラマ化された。私はその時、原作者があつた藤原新也と知る。

藤原新也、福岡生まれ¹8歳、写真家、小説家。

40年前に発表したインド紀行の写真集、メメント・モリ（死を想え）は現在も読み継がれている。目を背けたくなる写真と、強烈な言葉が一体となり、胸の中を突き刺してくる。

「この世は彼^あの世である。天国もある。地獄もある」

「死体の灰には、階級制度がない」

「死とは死を賭して周りの者を導く人生最後の授業」

「本当の死が見えないと、本当の生も生きられない」

この写真集は私の本棚の真ん中にある。

そして今年五月²4年ぶりに、メメント・ヴィータ（生を想え）が出版された。写真は一点もない。400頁を超す大作だ。

コロナ、震災、環境破壊による大災害、頻発する戦争、そして理由無き殺傷。自然が狂えば、人間も動物も植物も皆狂う。熊が人を襲う時代。

今年の夏、私はこの本と格闘している。

第二十九回袋公園桜まつり

第十三回詩歌大会受賞作品

旭市長賞（俳句）

軽四を止めて一服花の下

旭市 高野寿美子

旭市二十周年記念特別賞（俳句・川柳）

空いっぱいさくらの花でピンク色

三川小三年 伊藤 紘

旭市議会議長賞（俳句）

手を繋ぐ^{つな}八十路^{やそじ}の姉妹花の道

旭市 岡 邦俊

旭市教育長賞（短歌）

爛漫と咲きし桜にさそわれて

杖つく我も歩み進める

旭市 亀田 昭子

旭市文化協会会長賞(俳句)

寡黙なる友も饒舌花の下

旭市 薄田美津子

桜まつり実行委員会会長賞(川柳)

トランプさん一緒に花見はいかがです

旭市 伊東 禮子

優秀賞(俳句の部)

友は今施設楽しと花便り

旭市 森川 静江

手を引けば母のまるい背桜舞う

旭市 林 利恵子

独り身も慣れて見上ぐる初桜

旭市 花香 竹夫

初桜補助輪とれし吾子はしゃぐ

旭市 林 由理

見てごらん犬に花指す老夫婦

旭市 井沼 雅子

優秀賞(短歌の部)

花衣裾の乱れに手を添へて

桜月夜の風の戯れ

旭市 金野 喜久枝

杖つきて肩寄せ合いし老夫婦

今満開の花道を行く

旭市和日和

優秀賞（川柳の部）

女子会や花に負けじと花咲かす

匝瑳市 荒木 美枝子

子どもの部作品

優秀作（俳句・川柳）

大すきだよ春のにおい花の色

三川小三年 宮本 あかり

はるのおとさくらひらひらきこえるね

三川小六年 和田 麗

せんそうをやめてみんなであらおうよ

三川小六年 鈴木 三智

新学期みんなで歩く桜道

三川小六年 岩瀬 栞奈

まけないぞさくらのしたのかふんしょう

三川小六年 石田 優空

佳作（俳句・川柳）

父さんときれいなさくらみわたした

中央小三年 岡野 ななみ

春の風心もぽかぽかあったかい

三川小四年 岩瀬 柚南

たのしそうおしゃべりをするすずめの子

三川小四年 伊藤 孝一郎

さくらまうまどをあけたらはるのかぜ

三川小五年 鈴木 美舞

今ここに春のにおい花ひらり

三川小六年 佐藤 優香

佳作（短歌）

さくらさく四年生になるわたし

横浜市立獅子ヶ谷小四年

新しい自分を作る春

江口 莉花

特別寄稿作品

旭市文化協会会長

花園 千名美

鯉の餌は腹いっぱいの花菜風

風強く筏にならぬ桜かな

花の雨合々傘の小さきこと

待ちかねて桜より多し人の群れ

花筏潜り出では散らす鳥

旭市文化協会文芸部長

相沢 弘幸

出番待つりボンの子等に花ひらり

花の下フォークソングの反戦歌

はらはらと桜に希ふ平和かな

花ふはりクロッシェ帽に留まり来て

花疲れトランプカードおかたづけ

旭市観光物産協会事務局長 水野 竜也
春立つや20周年耀きて

旭市観光物産協会 鈴木 宏江

春雨や雫に溶け込む花の色

木漏れ日に落花明るし散歩道

花筏降り立つ鴨の裂きにけり

旭市観光物産協会 渡邊 恵里華

風にのるさくらの香り朝の道

春霞どこまでが夢どこからか

さくら散る声のぬくもりまだ袖に

旭市地域おこし協力隊 金子 彰悟

春桜袋公園の静けさよ

桜散る風に乗る声遠くなる

袋公園桜の花が笑い出す

編集後記

映画「国宝」が評判だ。二人の若者の切磋琢磨と成長を歌舞伎の世界に描く。舞台に立つための稽古が過酷だ。振り返りの姿勢を保ち静止。微動だに出来ない。師匠の渡辺謙の叱責が容赦ない。日本の伝統の芸能を伝えていくのは並大抵ではない。そして舞台の上では、そんな稽古の裏側は見せずに、煌びやかに華やかに踊る。それが芸。翻って文芸も「芸」の文字がついているがどうだろうか。心血を注いだ文章、行間からさりげなく滲み出る文章であろうか。定かではない。文芸部員の減少が続いています。芸能のような厳しさはございません。どうぞ気軽に仲間をお誘いください。

文芸部長 相澤 弘幸

あさひ文学

第二十一回旭市文化祭 参加号

発行 旭市文化協会 文芸部

発行日 令和七年十一月一日

編集 相澤 弘幸

連絡先 〒二八九―二六〇四

旭市高生四九〇―九

相澤 弘幸 方

電話 0479-55-6116

Fax 0479-55-6116

携帯 090-4123-1862